
忘却炉

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘却炉

【Nコード】

N9963C

【作者名】

冴島岐之

【あらすじ】

何かをしたらか、時間が経てばとか、そんな風にして『忘れる』なんて、所詮不可能だったんだ。

何かを無くしたとか、何かを忘れたとか、本当はそんなこと、ひとつもないのかもしれない。

自分から逃げ出したくてしょうがなくて、夜十時を過ぎてから家を出た。父親には『手紙を出してくる』といってある。嘘はついていない。高校時代の友人に書いた手紙、本当は出そうか迷っている、あと数十メートルで郵便ポストに着くのに、未だにこの手紙の行く末は決まらない。

「さみい……」

今は、十月だったか。長袖一枚の体は風が吹いてくるとふるえあがってしまう。腕を組んで擦り合わせながら歩くと、急に強い風が前から吹いてきた。「うわっ」小さな悲鳴と共に、反射的に腕を掴み目を閉じる。紙の揺れる独特のパサパサという音がして、片目だけを開けて右手に持っていた手紙の様子をうかがう。

強風はしばらく止まず、次第にとても前へ踏み出せない程に強くなった。もちろん目だって開けていられない。手紙はバサリバサリと揺れ、しわくちゃになっていく。けれどそれをどうにもできなかった。風から庇えば、庇って抱き締めた分だけしわになるだろうことはすぐにわかったからだ。ただ飛ばされないよう、強く手紙の端を掴む、それしかできなかった。

「くっ、マジ勘弁。風止めよ！」

半ば自棄になり、悪態をつく。だが吐いた言葉すら風に押し返され自分の元へ返ってくる、あるいは押し流されるようで、さらにイ

ライラした。

仕方なく黙って耐えていると、風は吹き始めた時と同じようにぴたりと止んだ。なんだったんだ、そう思い意味もなく前方を睨み付ける。赤いポストはもう視界に入っている。もしかして、出さない方が良くと止められているのかもしれない。

それでも、向き合うと決めた。自己満足だ、ただの。嘲笑われてもしようがないだろう。今さらだ、なんになる。そんなこと、自分の方がよくわかってる。これは自分なりの罪滅ぼしなんだ。

もう一度、話してみたいと思った。ずっと気にかかっていた。負けなかった理由を教えて欲しい。

赤いポスト、あの日見た血の色に比べたらなんて現実味のない色だろう。

右手にしっかりと掴んだ、というより握った、すでにぐちゃぐちゃになってしまった手紙を見つめる。それからそっと、投函口に差し込む。カタン、小さな音と共に、手紙はなくなった。

全ては自分に還ってくる。今、まさにそれを体感している。

結局、忘れることも、なくすこともないのだろう。他人にしたことも、なくしたものも、いつか別の形で還ってくるから。

昔みたいに戻りたい。

最後に書いた一文を思い返して、何故だか涙が溢れた。それから一台の車が通り過ぎるまで、ずっと赤いポストの投函口を見つめていた。

〓 END 〓

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9963c/>

忘却炉

2010年12月21日19時18分発行